

60年を迎え、皆様への感謝をこめて

自立を目指す障がい画家の日本での活動が、今年で60年を迎えました。多くの皆様のご協力によって活動が継続されていることに深く感謝申し上げます。今号は、長きにわたり協会を牽引してきた画家・水村喜一郎から話を聞くとともに、そのほかの日本の障がい画家たちの絵と想いも載せています。どうぞ御覧ください。



活動60年を振り返り

この協会に参加したのは、17歳の頃だったと思います。ドイツの口と足で描く芸術家協会のベルトホルド・オールメルさんがやつて来て、協会に入らないかと誘ってくれました。ちょうどその頃、油絵を描いている時であったから有難いと思いました。病気やけがが原因で、あるいは生まれつき両手の使えない人たちが世界に多くいることを知りました。そして、身体の使える機能、つまり口、あるいは足で絵を描いている画家たちを知りました。初めは奨学生でしたが、協会の奨学金が僕の勉強を助けてくれま

私の生きる道 10

水村喜一郎 協会60周年とともに
口と足で描く芸術家協会は、1956年にヨーロッパで生まれ、1961年から日本で活動を開始しました。画家・水村喜一郎は、設立当初の早い時期から協会に所属し、共に歩んできました。



した。26歳の時、協会の会員となり、将来の不安と欠乏から解放されました。それからずっと絵を描いてきました。この協会が60年も日本で続いてきたのは素晴らしい」とだと思っています。

協会の存在意義とは

多くの国で、口と足で描く芸術家協会の活躍が続いていることによっても感動しています。人はそれぞれあらゆる可能性を持つていると思います。だけでも、両腕が無い、あるいはマヒしているということは、大変なハンディキャップです。でも、それを乗り越えて生きようとする術の一つに、口や足で素晴らしい絵を描くことがあります。そうして「生きる」と「絵を描く」が合致して成り立っているこの協会は、まれに見るユニークな、素晴らしい協会だと思います。

協会は、障がい者の相互扶助、自立を目指しています。自分たちの描いた絵で自分たちを助ける。この自立の精神は尊いと思います。ただ援助だけを受けるのとは違い、生活実感があります。この中から、僕は宿

命に立ち向かうことを学びました。そして、どんな状況においても、自身に妥協する」となく、自分の選んだ芸術の道を極限まで追いかけることができるのだと思います。

「絵を描くこと」は「生きること」

小さい頃から絵を描くことは好きでした。9歳の時に高圧線に感電して両腕を肩から失いました。多少の不自由はありました。が、先生や友人たちの温かい応援のもと、苦労と思わず育ちました。生まれつきの性格でしょうか、僕は落胆する前に無意識に闘いを求めていたように思います。その当時の担任の先生が「水村君は口で筆を持てば絵を描けるのではないか」と言ってくれました。そして絵が描けてとても嬉しかったことを今でも覚えています。それから「絵を描く」と「生きること」は一緒になりました。今もその思いは続いています。中学2年の時に、油彩を知り、高校2年の春に展覧会に入選。これを機会に油絵への情熱はさらに高まり、師に恵まれ、協会の奨学生となつてからは、熱中の度を増しました。

1946年7月生まれ。9歳の時に高圧線に誤って触れ両腕を肩から失いました。以後、手の代わりに口と足を使い、生活の全てにわたって何事にも果敢に挑み、自助の精神を貫き通しています。14歳の時から口で絵筆をとって描き始めました。17歳の春に初めて公募展に入選。これを機会に油絵への情熱が高まります。静寂と安らぎを宿す世界を独自の美しさで描き、「描く詩人」と言われ、技術とその絵の持つ力は傑出しています。

水村 喜一郎

(千葉県・口で描く)

掲載作品について

代表作や自分の気に入った一点を選べ、と言われても困っちゃいますね。出来不出来は別にしてそれぞれに思い描けるものしか描けないですから。ただ自分自身の今までの絵の流れをみると主にチョット切ない寂しい感じの風景を中心に描いてきたように思います。ですから「夕映えの運河の工場（川口）」などはどうかと思いま

た。

作者・追記

「キュー・ボラのある街」という映画が昔あつた。おそらく自分が16、17才の頃だったと思う。キュー・ボラとは鉄の溶解炉のこと。この映画は鉄物の街、埼玉県川口市が舞台の青春ドラマで、貧困、親子の問題、民族、友情などを描いていたような気がする。あの当時の自分の問題とも絡めて見ていたので、うつすら覚えている。ところでこの「夕映えの運河の工場」も芝川沿いのキュー・ボラの工場である。たまたまこの川沿いを通った時に「描きたい」と思った。その後、数年前に行つてみたら懐かしい面影は全くなく、ただただ現代そのもののマンションが林立していた。（水村喜一郎・2019年秋）



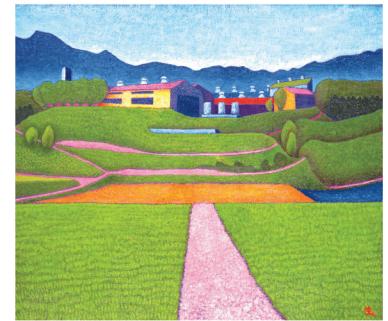
「海底から見た風景」

石橋 亨弘

（大阪府・口で描く）

私の「ゆめ」は、自分のアトリエ兼ギャラリーをつくることです。気のいい仲間たちが、コーヒーを片手に会話していく、私は部屋の一角で絵の制作。周りにはいろいろな障がいのあるアーティストが作った作品が置いてあります。現実には難しいかもしれません。それを実現するために、今自分ができること皆さんに喜んでいただける絵をいっぱい描いていきたいと思っています。

この「海底から見た風景」は、初期の作品です。見えたことがない視点で描いてみました。その時々で、どんな作品に仕上がるか、私にもわからないので、私自身も楽しんで描いています。



「丘」

石原 生美夫

（神奈川県・口で描く）

現実を逃避し、夢想の世界に遊び、過去を悔む人生は、どん底をさ迷っていました。そんなある日、いつも見慣れた窓際の景色に驚きました。今まで見過ごしていた日常の中に、「自然のすばらしい色の世界」を発見したのです。その日は不思議に心が躍り、いつの日か、この心境を絵として表現したいと思いました。この「丘」の風景は、自宅から神奈川県総合リハビリテーションセンターに行く途中の伊勢原市郊外にあるコンビニの駐車場から眺めたお気に入りの景色でした。今は再開発で見る影もありません。あの「丘」は、私の忘れ得ぬ心の風景になりました。



「老人と子供」

（生前、絵に対する自身の想い綴った文章です）

井上 忠

（岡山県・口で描いた）

私は、高校2年生の時、秋の運動会で首の骨を折るがをして手足の自由を失いました。ずいぶん昔のことゆえリハビリなどもなく、身の回りのことは何もできません。しかし、たった一つ、神は私に絵を描くことを残してくれました。私はこのことをもつて生きるために、手足をつけて、一人三脚で歩くことを練習してきました。この「丘」の風景は、自分が描いておりました。描くスピードは健常者に比べて何倍も遅いですが、描いている時間は誰にも負けません。遊ぶことも、人との付き合いも、身の回りのことも何もないくらいなので、ただひたすら絵を描くことには没頭しております。何も残すものはあります、1枚でも自分の納得いく絵を残したいと思います。



「午前6:58(横浜)」

梅宮 俊明

（埼玉県・口で描く）

私が協会に所属して10数年たちました。協会に入り、いろいろの活動をさせていただき、本当に良かったと思います。私以外の画家の人たちとの出会いは、私にとっては素晴らしい宝物です。これからも、実演など皆様にお会いできる日を楽しみに日々精進してまいります。

この横浜の絵は、クリスマスの時に友人とライブを行ったときに、泊まったホテルから撮った写真をモチーフにしました。ホテルから見た朝焼けが綺麗で、どうしても描きたいと思い選びました。友人たちと一緒に見たライブも思い出として、描きながら楽しくなりました。



1959年5月生まれ。生後3ヶ月に

高熱により脳性小児になり、体幹四肢

障がいがあります。3歳から中学校卒業まで障がい児施設で暮らしました。そこ

で厳しい訓練を受け、口で何でもする

ことを覚え、描画の楽しさも知りました。

18歳のときに母が亡くなり、障がい者

施設に入り、通信教育でイラスト・パソ

コン・油絵などを勉強しました。その後は独学で、デッサンをはじめ、日本画



1952年12月生まれ。1971年3月、高校卒業後、交通事故にて頸椎圧迫骨折を負い四肢麻痺となりました。6年余の闘病生活

の後、神奈川県総合リハビリテー

ションセンターに入所。そこで、口と

足で描く芸術家協会の存在を知り、どん底の暗中模索の人生に希望

を見出しました。リハビリを兼ねて

描画に励み、通信油絵講座において

描画の基礎を習得。画家としての自立をめざしています。



「夕映えの運河の工場(川口)」

安達 嶽

（大阪府・口で描いた）

1939年10月生まれ。小学4年生の春雀の子を捕るために、変電所の鉄塔に登つて感電し両腕を失いました。12歳の時に初めて口に筆をとり、自然と絵を描き始めています。ハンディキャップを背負いながら様々な職業を転々としましたが、一生続けられる仕事を就きたいという強い思いから、本格的に絵画に取り組み、デッサンをはじめ、日本画、水彩、油絵と様々なジャンルの絵画を独学創作しました。



1944年6月生まれ。高校2年生時の運動会で、騎馬競技中に事故で首の骨を折り、以来首から下の神経が麻痺しました。受傷2年後、口で絵を描き始め、周りの人たちに励まされ、独学で技術を磨いてきました。入退院を繰り返しながら12年間家で過ごしましたが、父の高齢に伴い、重度障がい者施設に入院することを察内の車椅子の方に手伝ってもらつて、「一人三脚で作品を作成していました。



1966年8月生まれ。19歳時に自動車事故に遭い、脊椎を損傷し、四肢麻痺となりました。以降、車椅子生活を余儀なくされ、肩から下の感覚がありません。父の死後、自立への道を模索し、油絵の先生や一緒に描く仲間たちとの出会いを経て、口での描画を始めました。口に筆をくわえて油彩画を描き、マウススティックでパソコンを操作します。

一生、安心して一人で生きていくために、自分で描くことができる」とを模索し、日々努力して見つけたのが口で絵を描くことでした。春夏秋冬の絵のモチーフを求めて、精力的に国内外へとスケッチに出かけています。自分の求めていたモノを見つけては、はやり気持ちを抑え、それをキャンバスに描き、表現し、四季折々の風景や静物を毎日描いています。私の描いた作品を目に留めていた多くの皆様がホームページを見つけては、はやり気持ちを抑え、喜んでくださるならば、私自身も最高に幸せです。（生前、描く歓びについての言葉です）

飯原 孝

（新潟県・口で描く）

1970年1月生まれ。16歳時に交通事故で首の骨を折つて神経を損傷し、手足を全く動かせません。1年半の入院後、療養所に転院。隣の養護学校高等部を卒業し、あこで操作する電動車椅子に乗つて生活しています。描画は、子供の頃に地元白根市現大附属校で好きで、風に描かれていたり、絵を描くようになりたいと、療育部で始め、養護学校高等部では美術部に所属しました。



1966年8月生まれ。19歳時に自動車事故に遭い、脊椎を損傷し、四肢麻痺となりました。以降、車椅子生活を余儀なくされ、肩から下の感覚がありません。父の死後、自立への道を模索し、油絵の先生や一緒に描く仲間たちとの出会いを経て、口での描画を始めました。口に筆をくわえて油彩画を描き、マウススティックでパソコンを操作します。



1964年10月生まれ。未熟児として生まれたため発育に問題があり、生後11ヶ月で脳性マヒと診断されました。上下肢ともに重度の障がいがあり、両腕での日常生活がほとんど不可能で、歩くこともできません。介護され生かされるだけの人生から脱却したいと、幼少時より好きだった絵画を通じて生きがいを求め、積極的に取り組んでいます。

佐藤 拓也

(福岡県・口で描く)

田中 潤也

(愛媛県・口で描く)

茅野 清子

(神奈川県・口で描く)

築地 美恵子

(埼玉県・口で描く)



「ヤマネ」



「夏の思い出」



「Go Ahead」



「友と歩いた上高地」

西岡 良介

(広島県・口で描く)

姫野 とき子

(福岡県・口で描く)

牧野 文幸

(岡山県・口で描いた)

南 栄一

(長野県・口で描く)

協会は、世界中の様々な地域で精力的な活動を行っています。しかし、多くの発展途上国の障がい者は、人間としての尊厳どころか、常にその生命の危機にさらされています。私は、この命に描かれたヤマネは、メジャーな生き物ではなく、一般の目に触れることがなく、山奥の樹の上にひつりと暮らしているイメージがあります。だからこそ、より一層神秘的で口マンチックな感情を描き立てるべきだと思います。

1954年7月生まれ。高校2年生の夏、器械体操クラブの床運動の演技に失敗、首の骨を折り、第5・第6頸椎を損傷。両足は完全にマヒしており、両手の機能もほとんど失った。車椅子生活となりました。2年後、重度障がい者訓練センターに入所。リハビリの過程で絵を描き始めました。独学で技術を習得し、絵を描くことが自立への大きな支えとなっていました。

40代の時、交通事故で身体の自由を失った私は、「ああまた海へ行きたいな。夏の砂浜を思いっきり素足で走ってみたい」という思いで「夏の思い出」を描きました。もうかなわないことですが、事故前の元気な姿でみんな遊びたい。子供と一緒に海に行つた楽しい思い出は、今も脳裏に鮮明に焼きついています。

皆様のご理解とご協力が得られるような作品の創作を目指して描き続けていきます。

この絵に描かれたヤマネは、メジャーな生き物ではなく、一般の目に触れることがなく、山奥の樹の上にひつりと暮らしているイメージがあります。だからこそ、より一層神秘的で口マンチックな感情を描き立てるべきだと思います。(生前の言葉より)

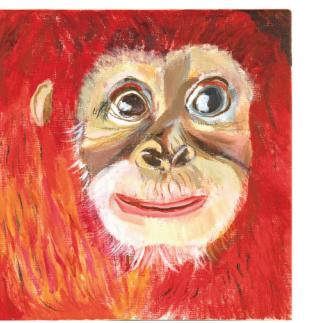


1954年7月生まれ。高校2年生の夏、器械体操クラブの床運動の演技に失敗、首の骨を折り、第5・第6頸椎を損傷。両足は完全にマヒしており、両手の機能もほとんど失った。車椅子生活となりました。2年後、重度障がい者訓練センターに入所。リハビリの過程で絵を描き始めました。独学で技術を習得し、絵を描くことが自立への大きな支えとなっていました。

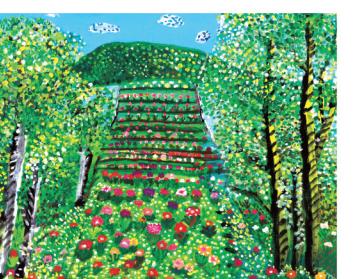
1954年4月生まれ。頸髄損傷による四肢不全麻痺。事故以前は絵を描いたことがありませんでした。入院中にリハビリのために口で描き始め、学びました。退院後は一般的なコンクールにも出展し、個性的な作風と言われています。幻想的で色が美しい絵が好きです」と本人は言い、見る人の心に夢をプレゼントできればと、絵を描き続けています。



「夕日に向かうバラ」



「オランウータン」



「暑い夏の花畠」



「あざみの花瓶(夏野より)」

協会に所属して長くなります。正会員を目指し努力しているのですが、僕には足りないものがあるようです。今回の作品は、アシスタンントがいなくなり困っていた中、新しいアシスタンントが見つかって、再起の気持ちを込めた作品です。この絵が評価されることを願っていますが、ここ数年、アートダイアリーに自分の作品が掲載され、家族をはじめ、同じ障がいを持つ仲間たちにも喜ばれています。また、障がい者の芸術文化活動を企画運営するグループを立ち上げ日々奮闘しています。

1964年10月生まれ。未熟児として生まれたため発育に問題があり、生後11ヶ月で脳性マヒと診断されました。上下肢ともに重度の障がいがあります。両腕での日常生活がほとんど不可能で、歩くこともできません。介護され生かされるだけの人生から脱却したいと、幼少時より好きだった絵画を通信教育で学び始めました。1985年、障がいの画家の絵画教室に参加生きがいを求め、積極的に取り組んでいます。



1999年1月生まれ。小学2年生の時、自宅の前で交通事故に遭い、頸髄損傷の完全四肢マヒとなります。受傷後、周りの方々からの多くのサポートもあり、通っていた小学校に戻ることができ、友達と再会できたことはとても嬉しいことでした。小学校の先生に書道を口で書くよう勧められ、筆で書く楽しさに気づきました。そこで好きだった絵も描けるのではないかと思い、描いてみたらできました。その後は、週1回の美術の授業で描き、学びました。



1941年9月生まれ。出生時から脳性マヒで、両手両足が麻痺しています。小学校入学と同時に口で文字を書き、絵を描き始めました。41歳から本格的に絵画の勉強を始め、美術教師から基礎を学びました。多くの展覧会への参加経験があります。



1964年8月生まれ。幼い頃より絵画に興味を持っており、6歳から18歳まで絵画教室に通っていました。24歳の時に登山中の転落事故によって受傷。両手両足がマヒ状態となりました。入院手術を受け、2年後よりリハビリの環として口にサインペンを取り、絵を描き始めました。後に水彩画も始め、以前通った絵画教室の先生に再び絵画を習い才能を伸ばしています。

筆を口にくわえて描くというきっかけをくれたのは、小学4年生の時の先生でした。習字大会で初めて「友」という字を書きました。友達は、「潤君すいいやん!」と言つきました。すごく嬉しかったことを覚えています。その頃愛媛で開催された、口と足で描く芸術家協会の展覧会に行きました。その時、実演に来ていた牧野さんは、凛としていて格好良かったです。僕は、その姿を見て、身体が動かなくなつた不安な気持ちが吹き飛びました。そして画家になりたいという夢もできました。

「オランウータン」は、オランウータンの子供が順風満帆に生活を送っているおでんばな子供がいろいろなものに興味を持つている。そんな純粋な気持ちを描きました。

絵を描き始めて、かれこれ30年になります。手足が不自由で車椅子の生活をしているので、口で絵筆をくわえて描いています。以前は油絵で20号くらいの作品も描きましたが、個室の自分の部屋では油絵は無理となり、大きさも10号くらいの作品となりました。水彩画が思うように描けず苦労しましたが、アクリル絵の具を使って油絵に近い描き方ができるようになりました。ただ、作業を短時間にして、口で文字を書き、絵の具が乾いてしまって難しいです。女子美大が近くにあり、学生の皆さんにお手伝いしてくれるので、週4日キャンバスに向かい、いろいろな表現ができるようになります。

手足が不自由で車椅子の生活をしているので、口で絵筆をくわえて描いています。以前は油絵で20号くらいの作品も描きましたが、個室の自分の部屋では油絵は無理となり、大きさも10号くらいの作品となりました。水彩画が思うように描けず苦労しましたが、アクリル絵の具を使って油絵に近い描き方ができるようになりました。ただ、作業を短時間にして、口で文字を書き、絵の具が乾いてしまって難しいです。女子美大が近くにあり、学生の皆さんにお手伝いしてくれるので、週4日キャンバスに向かい、いろいろな表現ができるようになります。

手足が不自由で車椅子の生活をしているので、口で絵筆をくわえて描いています。以前は油絵で20号くらいの作品も描きましたが、個室の自分の部屋では油絵は無理となり、大きさも1



「生きる」

手があるのと無いのでは、やはりハンディが大きいものです。背伸びもしましたが、比較すると辛くなります。しかし、ありのままの自分を受け入れた時、自分しかできない絵、生き方をしようと思った時、心が軽くなりました。大きな絵は芸術性が高いか、小さい絵はダメなのか、悩みました。が、小さな絵でも大作を描く気持ちであれば同じではないのかと気づきました。皆さんにしていただけではなく、少しでもできるることをやつていただきたいと思っています。



1951年9月生まれ。小学3年生の春休みに、製材業を営む父を手伝い、機械のベルトに巻き込まれて両腕を失いました。事故のため、2年遅れで小学校へ4年生から入学。そこで、「口で本をめくり、足指で字をささえて掃除することなど、勉学と生活訓練に励みました。14歳の時、口筆画家入石順教尼に師事、口での描画と生き方の修行を始めました。



「落ち葉」

デザインや絵画などの作品を通して社会経験をふやし、将来の自立に向けて社会参加をしたいと強く望んでいます。描画の経験は浅いですが何でもいろいろな方法で描いていきたいと考えています。「将来、好きな絵に関係することが仕事になつたら、夢のよう！いろいろな描画にチャレンジして、技術を磨き多くの人に自分の絵を見せてほしい！」との思いから、絵を描く環境を整えたいと一人暮らしを始めました。

南正文

(大阪府・口で描いた)

六鹿 香

(愛知県・口で描く)



1999年2月生まれ。未熟児として生まれ、手足等が動かさずに、生後4ヶ月で先天性多発性関節拘縮症との診断を受けました。デザインや絵画などは、幼いころから好きで、高校時代からはマーチングファンのアーリーを使って描いていました。2016年に開催された「伊勢志摩サミット」のロゴマークのコンテストで、「デザインしたマスク」が入賞しています。



「楽しみなクリスマス！」

この絵は、「口と足で描く芸術家協会本部が、「CONGRATULATION」をテーマにコンテストを開催した際に提出した絵です。制作期間は2年以上かかっています。途中気が乗らざる保管しながら描いていました。ソリーや小物類は、我が家で集めたものです。クリスマスまでの温かい飾りつけされた部屋で、サンタクロースの登場を待っている少女を描きました。50号の作品で、大きいサイズの場合下に座って描いているため、届かない部分はキャンバスを回してもらつて描き切りました。これからも、喜怒哀楽や空気感が伝わる絵をいろいろな手法で描いていきたいと思っています。

森田真千子

(大阪府・口で描く)



1956年4月生まれ、生後10ヶ月での高熱による脳性マヒのため両手が全く使えず、体幹まで、下肢マヒがあります。肢体障がいの養護学校時代、小学部高校学年頃からロボット工学に鉛筆をくわえ文字を書き始め、努力によって口で何でもできるようになりました。同校卒業後は、東洋大等部卒業で絵画に興味を持ち、卒業後は、絵画による自立を決意し、強い意志とエネルギーで才能を磨きました。

2016年芦屋市立「GALERIA」開設



「花」

私は子供の頃から絵を描くことが大好きでした。母に早く旅立たれたために、兄嫁に介護をお願いしました。そのことが私にとって絵を描く喜びにつながりました。なぜかといふと、兄嫁の家族は画家一家だったからです。子供の頃はよかつたのですが、施設では辛い日々を送りました。しかし、そこでも絵画クラブに入つて絵を描いていました。そのことがきっかけで協会の存在を知りました。現在は、大好きな花の絵を思いつき描いています。私にとって、描くことは、「生きること」そのものだからです。

山口かほる（東京都・足で描く）

(東京都・足で描く)



1950年5月生まれ。生後3ヶ月で脳マヒと診断されました。10歳の時に兄嫁から絵を習い、口で描くことを始めました。14歳で入所して施設では朝4時に起き、両手が使えないでの時間で朝食を自分で食べながら学校へ行きました。やがて宗教出会い、心の救いと友人達を得、忍耐を学びました。絵画は、年間研究所に通い學習を重ねました。初めは口で描いていましたが、年齢を使った体のためにとの助言で現在は足で描いています。